

報告

Intraoperative pathological consultation system using a web conferencing software tool.

星野昭芳¹⁾²⁾、小穴良保²⁾、野邑亮介³⁾、前田一郎¹⁾²⁾

北里大学医学部病理学¹⁾、北里大学北里研究所病院病理診断科²⁾、学校法人北里研究所 ICT 推進センター³⁾

Akiyoshi Hoshino¹⁾²⁾, Yoshiyasu Oana²⁾, Ryosuke Nomura³⁾, Ichiro Maeda¹⁾²⁾

¹⁾Department of Pathology, Kitasato University School of Medicine, ²⁾Department of Pathology, Kitasato Institute Hospital, ³⁾ICT promotion Center, the Kitasato Institute

近年 web 会議システムを使用したカンファレンスや学会・研究会が盛んに行われていることを踏まえ、我々は web 会議ツール(zoom)を使用した術中迅速病理結果報告の運用方法を検討した。従前の術中迅速病理の結果報告は、病理診断科と手術室をつないだ電話回線で行われることが多く、直通回線を介して、患者氏名・患者 ID の確認など 2 要素認証が採用されている。Web 報告を運用するにあたっての問題点として①患者確認のための 2 要素認証項目の選定、および②web 会議ツールを使用した場合の個人情報保護、またいわゆる 3 省 2 ガイドラインあるいは"オンライン診療の適切な実施に関する指針"を準拠する必要性、が挙げられる。①に関しては web 会議ツール画面上にて、手術室側からは患者氏名の口頭確認、ならびに手術室への術中迅速病理診断申し込み用紙の提示をもって確認、病理側からは喉頭確認および依頼書の提示・術者の目視確認などを条件としている。②に関しては web 会議ツール提供会社への確認、本大学の ICT 推進センターとの協議を踏まえたうえで、以下のとおりとした。手術室で迅速病理診断のための web 会議ツールのアカウントを作成して迅速病理診断専用アカウントとし、他の会議等での使用を禁止した。実際の運用としては「外部連絡先」に登録した手術室の iPad を呼び出し、回線接続する。患者確認のための 2 要素以上の認証を施行後、顕微鏡用デジタルカメラを使用し、PC 画面上に病理組織画像を描出したアプリを手術室と共有し、術中迅速病理結果を報告することとした。

これらワークフローに関する利点・欠点・問題点を整理し、甲状腺癌・副甲状腺の確認診断、乳癌断端・センチネルリンパ節診断の術中迅速病理診断の実例を報告する。